

ウィズコロナがもたらしたもの

全学共通カリキュラム運営センター総合系科目構想・運営チームリーダー／
文学部教授 山下 王世

2020年度は初めから終わりまでコロナ禍一色であった。

授業のオンライン化が決定した2020年3月、筆者はGoogle MeetやZoomの存在すら知らなかった。メディアセンターの御指南でなんとか操作できるようになったが、オンライン化にあたり授業の内容や構成を変更したので、春学期の授業準備は自転車操業状態となった。機械音痴であるゆえに毎回の授業では配信ミスをせぬようにと緊張の連続だった。

それでも夏休みを経て秋学期に入る頃には、オンライン授業ならではの可能性を探る心の余裕ができてきた。オンライン授業がきっかけで、Google EarthやGoogle Arts & Culture、インターネット上にある良質な映像資料、海外研究機関等のアーカイブ資料を頻繁に使うようになった。これらインターネットで入手できる豊富な資料をゼミ生たちに紹介し、どう使うと何が分析できるのかを話し合った。普段の対面ゼミでここまで海外のサイトを利用したことはなかったが、PC画面を通してだと、細かな資料であっても見やすいし、教員の説明も聞きとりやすいようで、反応がよかった。外国語のサイトから入手した資料を実際に利用してレポートを書けたことが、学生たちには少し誇らしいらしかった。

これに関連して、学生たちの多くが自分のパソコンを持ってくれたことも学びの質を高めたと思う。スマートフォンやタブレット端末では、PCでできることすべてができるわけではない。自宅にPCがあれば、上述のインターネット資料もじっくり吟味し分析作業を進めてもらえる。大学生になったら自分のPCを持つ、アフターコロナでもぜひ定着してほしいことである。

オンライン授業の短所はもちろんある。新しい人間関係の構築に時間がかかる点はそのひとつだ。筆者も既知の2年次生以上の学生諸君とはオンライン環境下でもコミュニケーションに問題を感じなかったが、1年次生に対しては自分の対応がこれで十分なのか手探りの日々だった。読んだこと、学んだこと、考えたことについてゼミ仲間とあるいは教員と議論することは、大学生の学びに欠かせない。最初にしっかりと人間関係を築いておくと、信頼関係の上になった活発な議論がしやすくなる。その意味でも初年次授業や入門系授業の対面実施は重要だと思う。対面とオンライン、両者の相乗効果を導き出す塩梅を意識しつつ、アフターコロナに向かって歩んでいけたらと思う。

皆さん、1年間お疲れ様でした。アフターコロナまできつとあと少しです。